

様式7

河川基金助成事業

報告書

川で学ぶ体験活動を通して感動する心を豊かに育みながら、
川の持つ力や危険性を知り安全への心を高める



助成番号：2020 - 7111 - 003

学校法人ろりぽっぷ学園 ろりぽっぷ泉中央南園

令和2年度

助成番号	助成事業名		学校名								
2020 - 7111 - 003	川で学ぶ体験活動を通して感動する心を豊かに育みながら、川の持つ力や危険性を知り安全への心を高める		ろりぽっぷ泉中央南園								
校長名	佐藤 真弓		担当教諭名	川合 桃							
過去の助成実績	なし (あり) [助成番号：2019-7111-003] 助成事業名：故郷の川や生き物に興味関心を持ち、自然の神秘や命の繋がりを大切にすることを育む事業										
キーワード											
対象児童生徒	高校生 (年 名) 中学生 (年 名) 小学生 (年 名) 幼児 (年長児 9名)										
対象河川名	七北田川 根白石川・広瀬川		活動場所の指定状況	(なし) 子どもの水辺 水辺の楽校							
年間学習計画（シラバス）における本助成事業の位置づけ											
テーマ：川で学ぶ体験活動を通して感動する心を豊かに育みながら、川の持つ力や危険性を知り安全への心を高める ねらい：身近な川での活動を通して、心を揺さぶりながら豊かな感性を育む。 川遊び・川の氾濫・避難を通して危険性を知り、体験する中で安全への意識を高める。 評価の観点：一人一人の子どもが生き生きと楽しく活動に参加出来たか。川での体験を通して興味・関心を持つことが出来ているか。また子ども自身が川遊びにおける危険を意識し、安全を考えて参加しているか。 活動時期：7月～翌年3月											
活動形態	総合的な学習の時間	各教科学習 ()	各教科学習 ()	学校行事	その他 ()	合計					
上記の活動時間数	10時間	時間	時間	時間	時間	時間					
支援者等（複数記入可）											
保護者	外部小学校	外部中学校	外部高校	外部大学	市民団体	専門家等					
河川管理者	行政機関（博物館、資料館）等		関係団体（漁協、農協）等		企業	その他					
支援概要											
活動成果	発表形態			成果作品							
	(学級単位)	学年単位	学校全体								
対外発表 ()											
安全対策に関する課題											
・子どもたちが川遊びを行う前にインストラクターとRACリーダーの職員が職員全体に河川研修を行い、川の安全な遊び方を学習する機会を設けた。また河川活動での事故や予測される子どもたちの行動等、起こりうる危険を把握し、さまざまなヒヤリハットを元に話し合い、子ども自身が川の危険性を感じ安全な方法を知ることが課題である。											
活動の成果と今後の課題・展開											
・子どもたちは身近にある「七北川」「広瀬川」「根白石川」での遊びを十分に楽しみ、川に親しみを持って活動に参加する姿が見られた。川や自然に触れ合う中で川に生息する生き物に出会い、発見した喜びを味わい、さらなる川への興味へと繋がっていった。川で活動する楽しさと、そこに潜む危険性を子ども自身が知る重要な経験となった。また台風の時期になるとその影響で川が増水し、年に数回ほど避難準備が発令され保育者と共に近隣にある高い建物へ避難する経験を持っている。保育園園舎前を流れる大好きな七北川であると同時に川の怖さも感じている姿が見られた。今回の川遊びを経験し、改めて川の持つ力を子どもなりに感じ、そばにいる保育者も危険性を事前に予測して誘導することが継続的な課題であり、今後は年長児の姿を通して異年齢児へと繋げていかなければならないと考える。											
活動内容と実施時期（主な活動を2つのみ記入）											
	部門	大分類	中分類	小分類	実施時期						
データベースに登録する活動分野	学校部門	教育活動	系		月						
			系		月						

※データベースに登録する活動分野は、助成事業実施の手引き P.47 の一覧表から代表的なものを2つ記入して下さい

様式14

〔学校部門〕 共通

助成番号	助成事業名	学校名・学校長氏名
2020-7111-003	川で学ぶ体験活動を通して感動する心を豊かに育みながら、川の持つ力や危険性を知り安全への心を高める	学校法人ろりぽっぷ学園 ろりぽっぷ泉中央南園

はじめに

ろりぽっぷ泉中央南園は、緑が豊かな“杜の都仙台”の北部に位置し、保育園園舎の目の前を七北川が流れている場所にある。平成27年4月に開園した本園は、子どもたちが生活や遊びの中で様々なものに興味や関心を持ち、多様な体験を積み重ねていく中で自ら考えて行動し生きる力を培って欲しいとの願いを持っている。子どもたちが体験することは決して楽しいこと、嬉しいことだけではなく、時には苦しいこと、悲しいことも体験している。子どもたちの失敗する経験も、自分の心と向き合い、その先には心が揺さぶられるような喜びや感動を感じられる事を子どもたちは知っている。そして、そこにはどんな時でも自分を信じてくれる友だちがいる。人生には、思い通りにいかない事があるが、どんな時でも自分を信じ、仲間を信じ、苦難や困難を乗り越えながら前に進んでいける人になって欲しいと願っている。

子どもたちは一日一日を一生懸命に遊び生活しながら生きている。ろりぽっぷで出会った仲間と共に様々な経験を通して、一人では出来ない事も仲間がいるから出来る事、仲間との絆が自分の心を強くする事。それが生きていく上で、大切な事と感じながら子どもたちはここで生きている。

今年は思いもよらない新型コロナウイルス感染症が拡大し、保育園の生活が制約され、行事が中止や延期をしなければならなかった状況があった。この河川活動は開園した当時子どもたちの成長のために大切に捉えてきた活動であったが、新型コロナウイルス感染症については、職員同士で何度も実施の有無を検討した。子どもの感性を豊かにするために感染防止対策を図りながら実施したい思いであった職員だが、そこには保護者の協力と理解が必要となった。

「この川遊びが保育園にあったから入園を決めました。年長組になるまで楽しみにしていましたから子どものためにやって欲しい」「川遊びの安全のために人数が必要であれば保護者の私たちも協力します」という保護者の声をいただくことが出来、実施に至る。

たくさんの方の協力と理解のもとに実施することができた今回の河川活動は、改めて大きな意味を感じることが出来た経験となった。



写真1

フィールド：仙台市泉区泉ヶ岳（七北田川の源流ひざ川）

日付：令和2年7月

成果：

〈心の育み〉

仙台平野を潤す河川の一つである七北田川は、その源流が泉ヶ岳のひざ川である。身近な自然をフィールドにした自然体験活動は、子どもたちにとって心を豊かに育むことが出来る。手つかずの大自然を十分に感じながら険しい登山道を歩き、ひざ川を目指す。大木に吊るされた熊よけの一斗缶に恐々と近づき、音をたたき出す子どもたちには「熊が出現するかもしれない」という緊張感もあったが、自然の中で見た初めての道具に面白さを体いっぱい感じている姿があった。（写真1）また水中眼鏡や網を使って川の生き物への興味や関心が広がっていた（写真2）

〈川の持つ力・安全への高まり〉

流れのある川の中を歩くことで、滑る岩場に苦戦する子どもたちの姿があった。大きな岩にしっかりと両手でしがみつき、動かない安全な岩を自分で選択し、体のバランスを取りながら足をかける場所を考えていた。動く岩や石に手足をかけることがどれだけ危険なのか子ども自身が考える経験となった（写真3）

〈思いもよらない出来事〉

川遊びを終えて昼食に準備するためにシートに戻って来ると子どもたちのおやつがすべてカラスに持っていかれる事件が発生。この日からカラスの特徴を調べ作戦が始まる。保育者の予測を越えた自然体験であった。



写真2

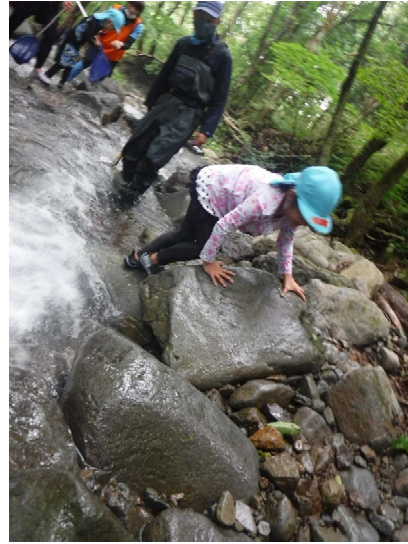


写真3



写真1



写真2

フィールド：仙台市泉区根白石（根白石）

日 付：令和2年8月

成果：

〈心の育み1〉

七北田川の中流である根白石川での川遊び。前回に体験した泉ヶ岳のひざ川の光景とは全く違うことに気づく。川の広さ・川の流れ・川の周辺の花や草など、子どもの目に映るものがどれも新鮮なものばかりだった。「川が広いね」「岩がない!!」「お日様が水にキラキラしているね」と心を揺さぶりながら歓声をあげている。ライフジャケットを着用することさえも新鮮で笑顔が広がっている子どもたちの姿が見られた。川の流れに沿って網を置き、自分の手で魚を捕まえることが出来た経験は満足感・充実感が育まれた。（写真1）

〈川の持つ力・安全への高まり〉

川幅の大きな川で安全に遊ぶためにライフジャケットを着用し、まずは5、6人が1列となる歩く練習を行う。川幅の広さに怖さを感じ、保育者にしっかりとしかみつき表情が固い。（写真2）

1歩1歩、川の中にある石の上を確認しながら前進する。川の中の小さな石がこんなにも動き、石の表面がつるつると滑ることを体で知る。更に奥へと進んでいくと、腰まで水位が高くなり「怖い・・・」とつぶやく子どもが多かった。

溺れた際の対策を考え

- ① 仰向けになって体の力を抜いて浮かぶ練習
- ② 投げられたロープを握る練習を経験する。

〈心の育み2〉

「怖いから嫌・・・」と、浮かぶ練習を拒否する子どももいた。しかし友だちが両手両足を広げて浮かんでいる様子をじっと観察する姿からやりたくない気持ちとやりたい気持ちが交差しているのが分かる。

「K男ならきっと大丈夫!」「がんばれー」と友だちから声をかけられ心の葛藤を繰り返している。恐怖心から全身に力が入り、体が浮かぶことが出来ないK男。何度も何度も挑戦しようとする。自分の心の中の恐怖心を乗り越えようとしている（写真3）

出来た喜びは満面の笑みからうかがえた。心の葛藤を繰り返したK男の表情は自信に溢れていた（写真4）

その後、全員でEボートに乗り、川魚を見つけようと楽しさいっぱいで川遊びに参加していた。（写真5）



写真3



写真4



写真5



写真1



写真2

フィールド：仙台市泉区 ろりぽっふ泉中央南園

日付：令和2年11月

成果：

〈心の育み〉

保育園の目の前を流れる七北田川。毎日の登降園の際に身近に感じているこの川を覗き込み、季節の変化を感じながら季節によってやってくる魚や川の上を浮かぶ鳥に興味を持っている。しかし河川付近はゴミが捨てられている現状があった。

「先生、大人ってどうしてお酒の缶とかコーヒの缶を草に捨てるの?」「ゴミ箱に捨てないのかなぁ・・・」「風がたくさん吹いたらゴミが川に飛んで行って、魚が食べたら死んじゃうよ!!」。子どもたちは川に生息する生き物の命を守るためにゴミ拾いをしようと作戦を開始。どんなに風が強く吹く日もゴミ袋を握りしめ、拾い集めた。「ゴミを捨てちゃダメ!」と願いを込めた看板づくりも行い、自分たちで設置も行う。

(写真1)

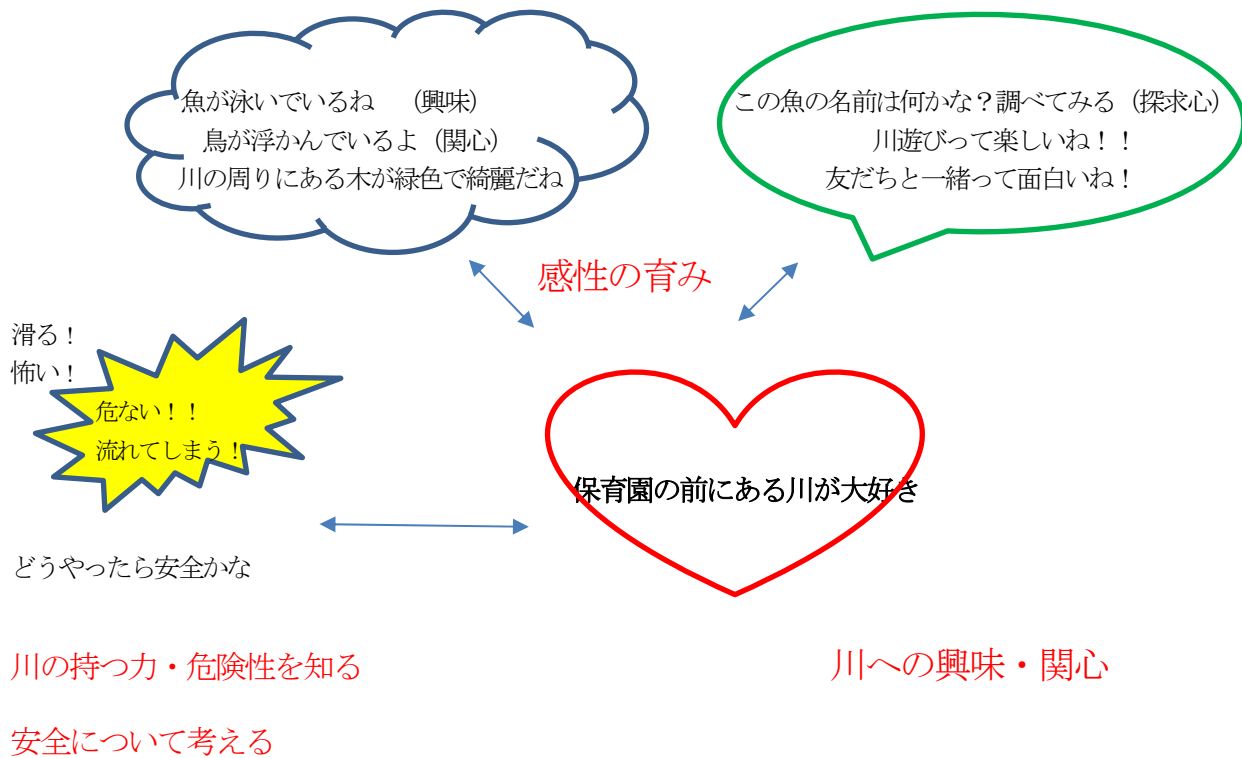
小さな年齢の子どもたちが魚の命を繋いでいくために環境問題にも取り組む経験は、これからの成長していく過程において、心の豊かな人間になってくれると強く感じる。

(写真2・写真3)



写真3

《河川活動を通した心の基盤づくり》



自然を体いっぱいを感じながら川で遊ぶ体験をし、心が揺さぶられ感性が豊かになる



サクラマスの飼育活動（水槽準備）



飼育する魚について調べる学習



水替えを通して友だちと共同性を育む



サクラマスの放流準備



飼育した生き物への愛着・稚魚との別れ



放流は自分たちの最後の役割

まとめ

毎年11月にはサケの遡上を観察し、12月には100匹のサケの卵がやってくる予定だった。温暖化現象によりサケの遡上が遅れていることや数が少なくなっていることを学習した。サケの代わりにサクラマスがやってくることを知る子どもたち。サケとサクラマスは何が違うのかを図鑑で調べ始め、興味を持つ姿が見られた。年長組の子どもたちは友だちと協力し合い、水槽を洗うなど積極的に参加し、サクラマスの小さな命を預かっていく経験の中で、自分たちが出来ることを考え、観察日記を記入するなど行動する力も身に付けていった。卵を孵化させ約3か月にわたり飼育活動を行ってきた子どもたちにとって稚魚への思いは強く、放流は悲しい経験でもあった。放流前日には「やっぱりサクラマスの赤ちゃんと離れたくない・・・」と別れを惜しむ声も聞かれた。放流後、サクラマスが自分の力で生き延びながら川や海を越えていく話を聞き、愛情を持って大切に育ててきたサクラマスを川へ送り出すことが自分たちの最後の役割であることを感じている様子だった。一匹ずつ丁寧に放流する中で「がんばってね」「鳥に食べられないでね」と優しく声をかける場面も見られた。命を育み、責任を持って取り組む力、仲間と一緒に協力し合いながら育ててきた力は子どもたちにとって心の基盤づくりとなった。

これまでさまざまなフィールドで河川活動に参加した子どもたちであるが、川への興味関心の始まりは、やはり毎日通う保育園の目の前を流れている七北田川がきっかけとなっている。自分たちの身近にある川を楽しむことが年長児になる前の0・1・2歳の低年齢から心を豊かに育むものであると考える。登降園の際に子どもが川を覗き込む姿に保護者も刺激を受け、大人になって忘れかけている美しいものを美しいと感じる感性が呼び戻されているであろう。この子どもたちが小学生になって45分の座学中心の教科学習に取り組んでいくが、この幼児期だからこそ時間に追われずに存分に川遊びを満喫し、教科書で保育者が教え込む河川学習ではなく、体験を通して一人一人が心を揺さぶっていく感性の育みは大きい。河川活動は感性の育みだけでなく、それぞれの川が持つ危険性を知り、自分自身でどうやったら安全に川遊びに取り組むことが出来るのかを体験から学ぶことが出来る。また災害における河川の増水、高台への避難を体験している子どもたちにとって河川活動はこれからも継続して行っていくことに大きな意味を持つと思われる。年度が替わると担任配置も違うが、河川活動で予測される子どもの行動や起こりうる危険を把握し、またこれまでの川遊びにおけるヒヤリハットを元に安全確保に努めていくことを今後も課題としていかなければならない。最後になるが感性豊かな子どものそばにいられる保育の仕事は、大人も感性が豊かになり心が磨かれる。最高！

